

## ジョンソン・ワックス本社 1939年 F.L.ライト

### 柔和な光の事務作業空間

住宅では開放性を追究したF.L.ライトだが、住宅以外の都市内の建築では閉鎖的に造る傾向があった。ユニティ教会（1906年）やラーキン社ビル、後のV.C.モリス商会、グッゲンハイム美術館がそうで、採光は天空光が主であり、ジョンソンワックス本社はその系譜上にある。

ラシーン市はシカゴから北上したミシガン湖畔の小都市で、ジョンソン・ワックス本社周辺は長方形グリッド状に街区分けされた低層の住宅地が広がる。

今回、対象とする事務棟と戦後'49年に増築された研究塔はちょうど街区を占める。3方の道路から数m緑地帯を設け、後退させて外壁を建て、大事務室空間を囲んでいる。

全体は事務棟とガレージ棟の2棟で、間を2階の集会室が結び、直下に車路を貫通させて入り込んだ中央に玄関を設けている。ほの暗い車路から階段を数段上り、玄関入ると3階まで吹き抜けた受付ロビーがあり、左右対称に設けられた回り階段とエレベーターが2、3階へ導く。そこを抜けると一挙に光の満ちた大空間が広がり息をのむ。

既存の欧米の事務所は部局ごとの部屋割が主流の時代、ここではペントハウス状の3階の役員室を除き、同一作業は同一空間が目指された。必要面積の充足のため、外周壁に沿って高さ2.9mレベルに奥行き約6mの中2階を巡らせ一体感を確保している。所々に螺旋階段を設け、中2階との連絡と地下の手洗い休憩室への動線としている。

外壁の目線レベルに窓はないが、屋根面と壁の取り合い部分と、中2階床下、給気、排気ダクト内蔵の天井面直下にガラスパイプを積み上げた採光欄間を回しており、その二重の光の水平帯により屋根や床が浮いているように見え、開放感を与えている。暖房は床暖房である。

43m×69mの事務室を、蓮の葉のごとく直径6mの円盤を高さ7.2mの柱で支える単位で縦1列6本、横10列、60本で覆い、四ないしは二つの円盤の間をガラスチューブで埋め、光を導いている。透過光は拡散してやわらかく、事務室中2階の四隅は4分の1円の曲面で入隅を消して陰がなく、腰壁手摺りの上下端も丸みを持たせ、光のグラディエーションが穏やかだ。また、ただ茫漠とした空間が広がるのではなく、6m強のグリッドで建つ柱がヒューマンなスケール感を生み、諧調をこの空間に与えている。写真では屋根の円盤の揚げ裏は暗く写るが、実際は蝋色で明るい。均一に乳白のエーテルで満たされているようで、落ち着いて作業に集中できる。

「大聖堂が祈る心を高めるように、精神を高める仕事の場にしたい」とライトは述べたが、第二次世界大戦開戦の年、20世紀屈指の事務作業空間が米国に完成した。



西側からの外観



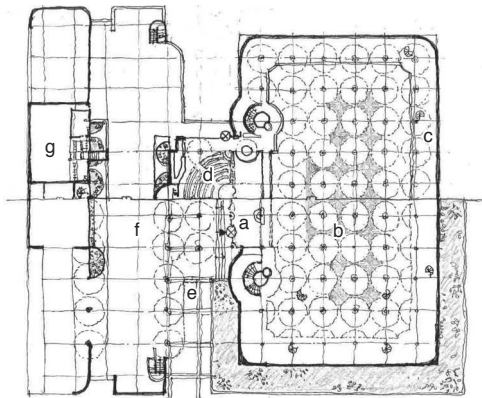
左 1949年に増築された研究塔



右 入口ロビー・右側入口



事務室 実際には円盤裏、天井面は明るい



1939年竣工時の平面図 下部1階平面図 上部 2階平面図  
a入口ロビー b事務室 c中2階事務室 d集会室兼食堂 e車路  
駐車場 gスカッシュコート